## 大宰府アカデミー・令和編　第11講　令和6年2月21日（水）質問及び回答（Q＆A）

## 「　菅原道真と大宰府　」
## 講師・回答：　松川　博一先生（九州歴史資料館学芸調査室長）

この度は大宰府アカデミー・令和編を受講いただき誠にありがとうございます。
皆様からいただきましたご質問につきまして回答いたします。
なお、ご質問につきましては、抜粋して掲載しておりますことをご了承ください。

### Q/　大宰府での道真公の暮らしはどのようなものだったのでしょうか？かなり厳しい生活だったと思っていたのですが、いかがでしょうか？

### A/　回答

　給与である公廨の配分については、先例に従えば、大宰帥（長官：10 分）の３分の１ということですので、大宰大少監（判官：３分）とほぼ同等ということになります。したがって大宰府の役人の中では５本の指に入る給与をもらっていたとみられます。食料については漢詩に「月俸」（月料）とみえますので月々の食料となる米・調味料・副食物などが支給されていた可能性が高く、そこまで食べものに困っていなかったと思われます。住まいについては、おそらく大宰権帥や大弐などの高官がかつて住んでいて、しばらく空き家となっていた官舎（館）を与えられたと考えられます。邸宅の立地や規模は権帥にふさわしいものだったと思われますが、漢詩からは手入れされておらず、かなり老朽化した建物を与えられたことがうかがえます。
　いずれにいたしましても、祖父の代から上級貴族の家に生まれ、右大臣の地位まで上り詰めた菅原道真公にとっては、大宰府での生活は侘しいものだったと思われます。

### Q/　大宰府が左遷の地となったのはいつ頃からのことでしょうか？

### A/　回答

史料で確認できる古い例としては、大化５年（６４９）の蘇我臣日向が「筑紫大宰帥」として西下していることが挙げられます。『日本書紀』では、当時彼の赴任を「隠流（しのびながし）」と言われていたと伝えます。ただし、「隠流」については左遷との理解のほかに、ほとぼりを冷ますための栄転的な側面をもった処置との見解もあります。

**※　ご質問ありがとうございました。**